

石岡市染谷

石岡市教育委員会 谷仲俊雄

遺跡の概要

宮平遺跡は、茨城県石岡市染谷に所在する遺跡です。「常陸風土記の丘」建設に伴い、昭和 63 年に試掘調査を行ったところ、台地上の全面で遺跡が確認されました。建物等の建設によって遺跡が破壊されてしまうところは本格的な発掘調査を行い、そのほかの公園となる部分は盛土等が行われ、遺跡は地下に保存されています。

茨城県指定文化財となっている「巴形銅器」（弥生時代～古墳時代）の出土が著名ですが、旧石器時代の石器や、縄文時代の竪穴住居跡や土坑、弥生時代の竪穴住居跡、古墳時代の竪穴住居跡、奈良・平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡と、各時代の遺構・遺物が確認されている石岡市内でも屈指の大遺跡です。

平成 25 年度発掘調査の概要

平成 25 年 12 月、公衆用トイレ建設工事に伴い、約 30 m² (3m×10m) の発掘調査を行いました。調査地は、「ふれあい広場」と呼んでいる芝生広場の北西隅にあたります。「ふれあい広場」は、常陸風土記の丘建設に際しては、盛土が行われ、遺跡が保存されていた部分です。県指定文化財の巴形銅器が出土した地点もこの「ふれあい広場」部分で、今回の調査地との距離は 30m 程になります。

検出した遺構は縄文時代の土坑群や、奈良・平安時代の竪穴住居跡 1 軒で、出土遺物は縄文時代中期の土器や、石皿などの石器、そして、奈良・平安時代の土器で、遺物収納箱 3 箱になります。

土坑のうち、最大のものは調査区の中央で確認した土坑 SK01 です。西側が調査区外に続いているのですが、径 2m 以上のもので、口が狭く、底が広がっている「袋状土坑（フラスコ状土坑）」と呼ばれるものでした。このような土坑は、縄文時代の遺跡に多く見られますが、こうした形状は温度を比較的一定に保つ効果があることから、貯蔵穴として使用されたものと考えられています。縄文時代中期の土器が多量に出土しています。そのほかの土坑群からも縄文時代中期の土器や出土していることから、同じ時期と考えることができます。「縄文時代中期に至って爆発的に増加する」（福山 1992）というこれまでの調査所見と合致します。

奈良・平安時代の竪穴住居跡 SI01 は調査区の北側で、住居跡の南東部分だけが確認されました。調査区の北には谷津が入り込んでおり、台地の縁辺部にあたります。遺構の密度は縄文時代ほど高くはありませんが、台地高位の平坦部だけではなく、斜面部や低地にも集落が広がるのがこの時期の特徴のようです（松田 1989）。

遺跡の評価

平成 25 年度の発掘調査は、小規模な面積にもかかわらず、竪穴住居跡 1 軒や縄文時代の土坑群を検出し、濃密な遺構分布を再確認することとなりました。しかし、まだ十分な整理ができていないため、個々の遺構の時期等については、詳しく検討できていないところがあります。

宮平遺跡のように遺跡全体の調査が行われ所見が得られている遺跡は石岡市では数少なく、遺跡内の土地利用がわかる貴重な事例になります。その一方で、出土遺物は膨大であり、調査データを整理・公開できていないという反省点もあります。

また、遺跡内すべてが「記録保存」されている（＝遺跡じたいは現地には残っていない）というわけではなく、遺跡が現地に保存されている部分も多く、すなわち、将来的には発掘調査による検証が可能な遺跡になります。

さらには、周辺の波付岩遺跡や峠遺跡、中島遺跡についても調査所見が蓄積されています。遺跡の規模や密度をみると、中心となる遺跡は宮平遺跡だったと考えられますが、それら周辺の遺跡と合わせ、「遺跡群」として、より立体的な検討も可能な段階となっていると言えます。

文献

安藤敏孝・箕輪健一・岩松和光・桜井二郎・佐々木義則 1989

『宮平遺跡—発掘調査概報—』石岡市教育委員会

石岡市文化財関係資料編纂会 1995『石岡市の遺跡—歴史の里発掘 100 年史—』石岡市教育委員会

福山俊彰編 1992『宮平遺跡—平成三年度発掘調査報告書—』石岡市教育委員会・山武考古学研究所

松田政基編 1989『宮平遺跡発掘調査報告書』石岡市教育委員会・山武考古学研究所

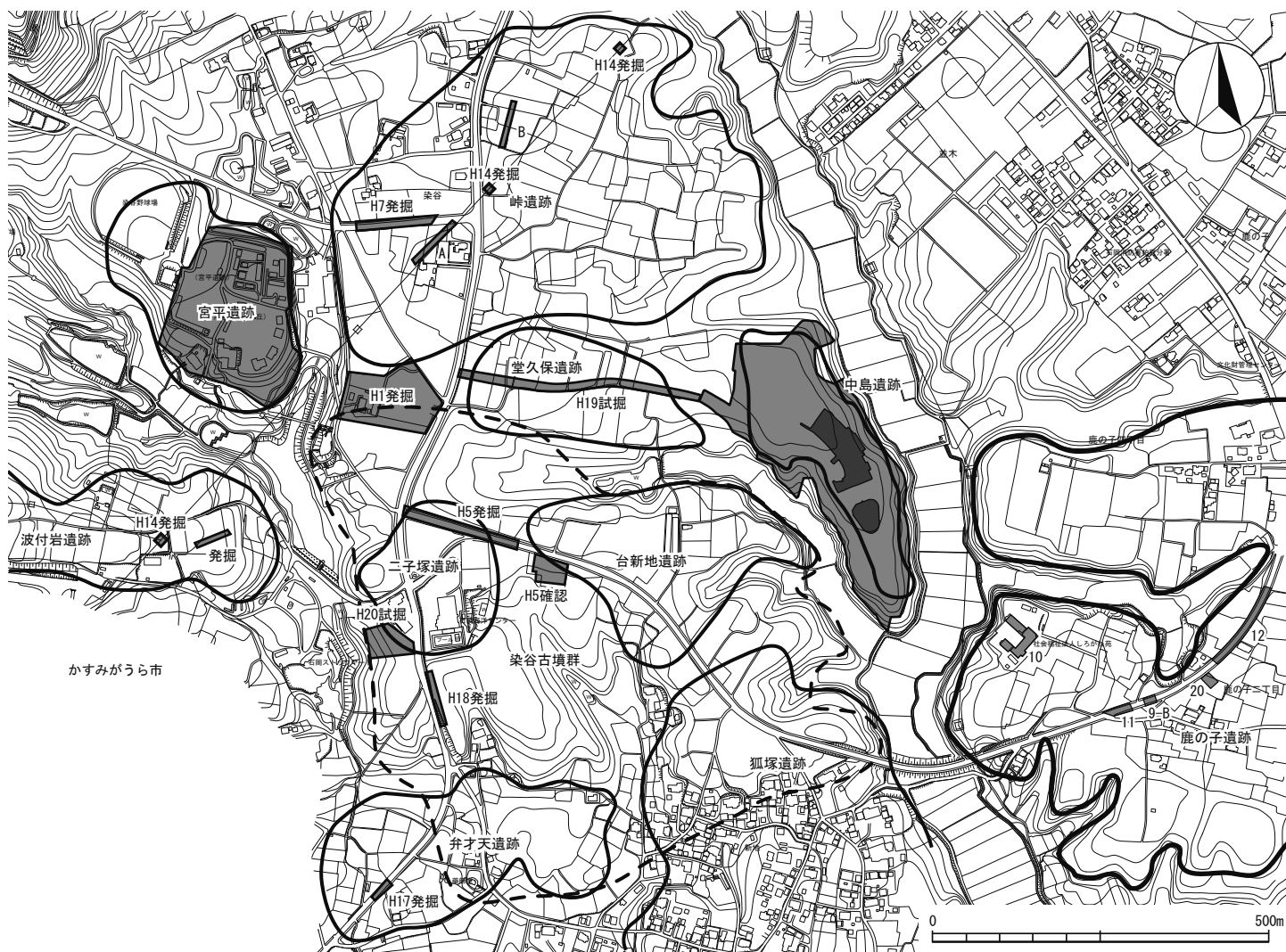


図1 宮平遺跡と周辺の遺跡 (S=1/10,000)

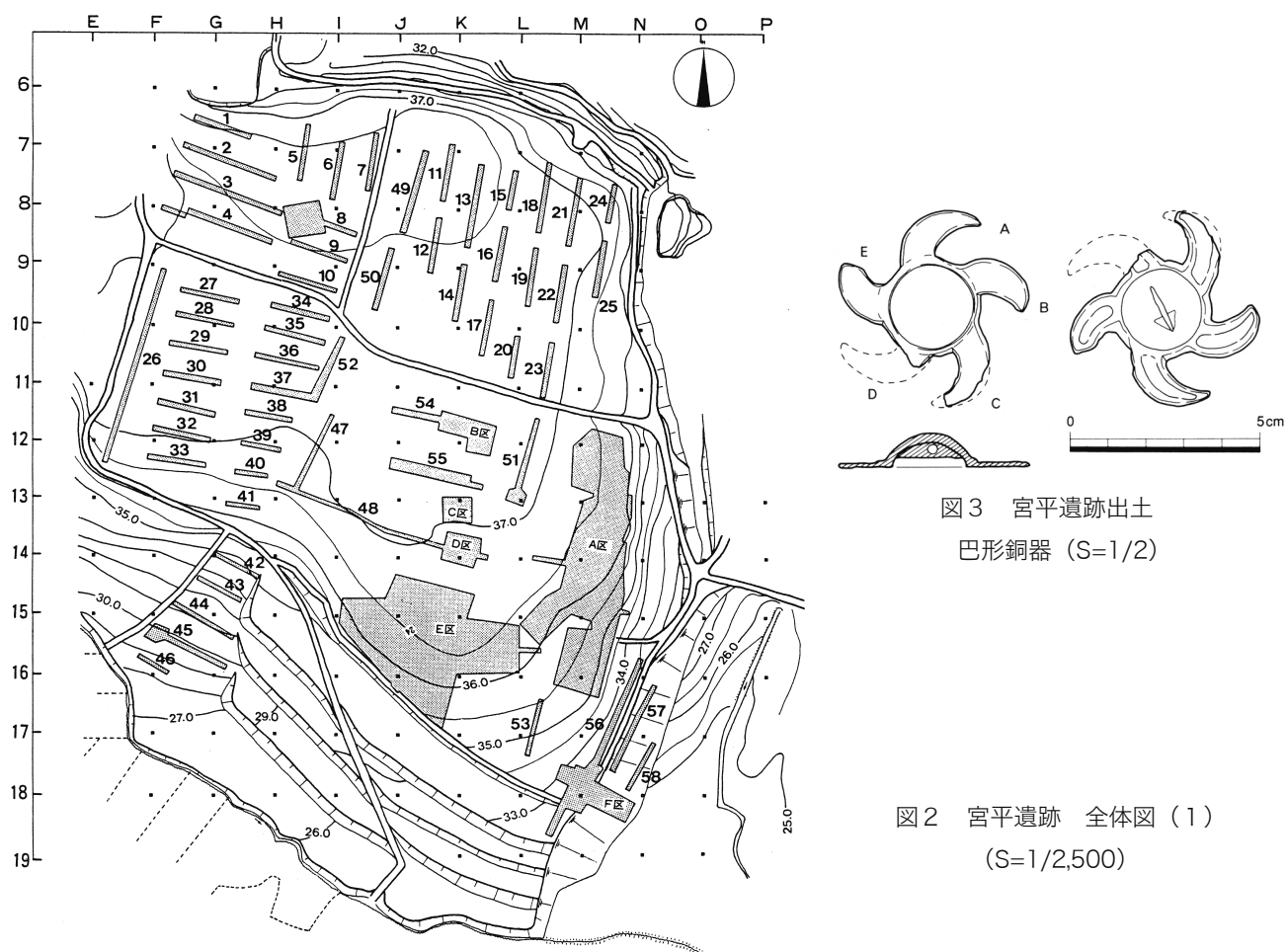
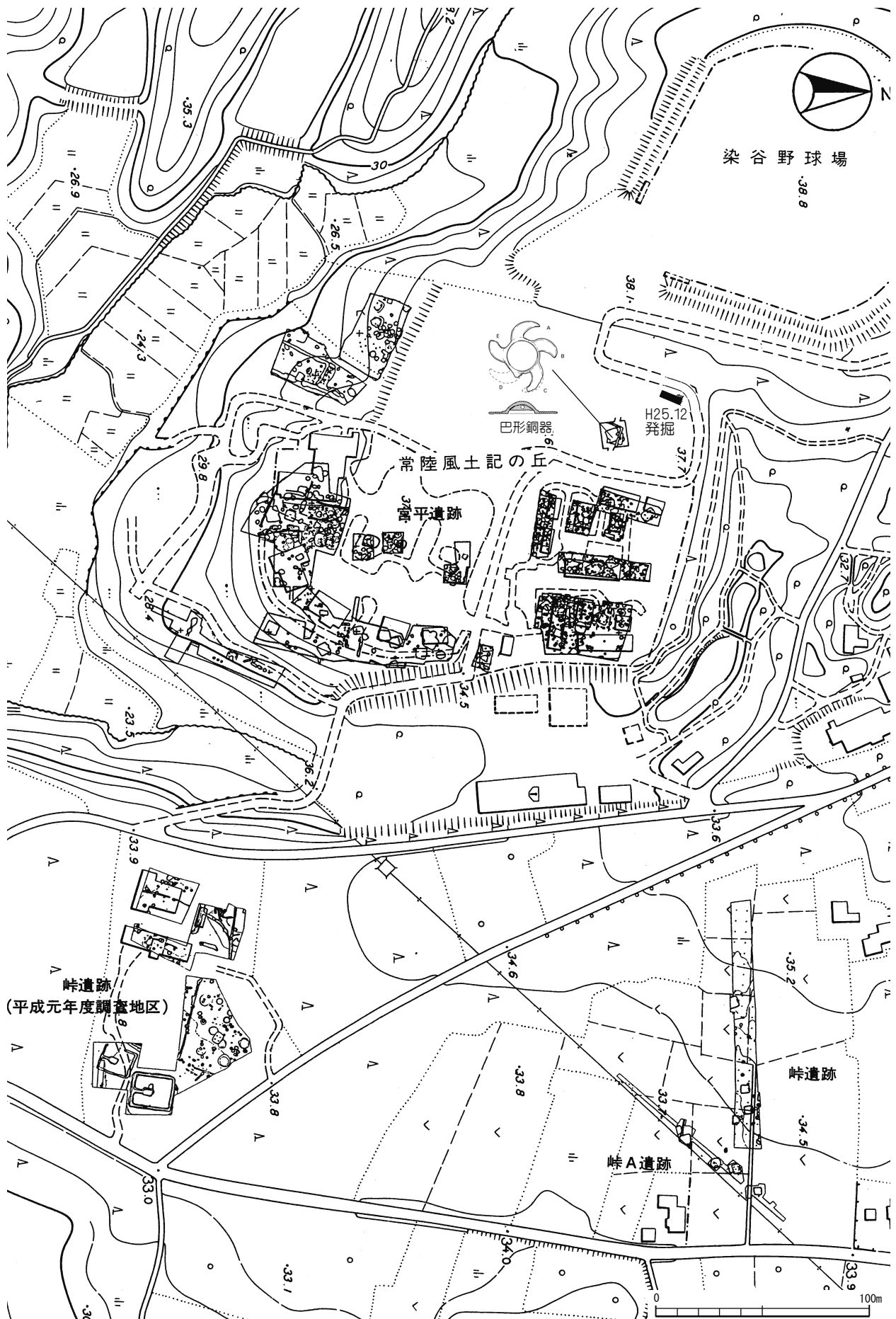


図2 宮平遺跡 全体図(1)
(S=1/2,500)



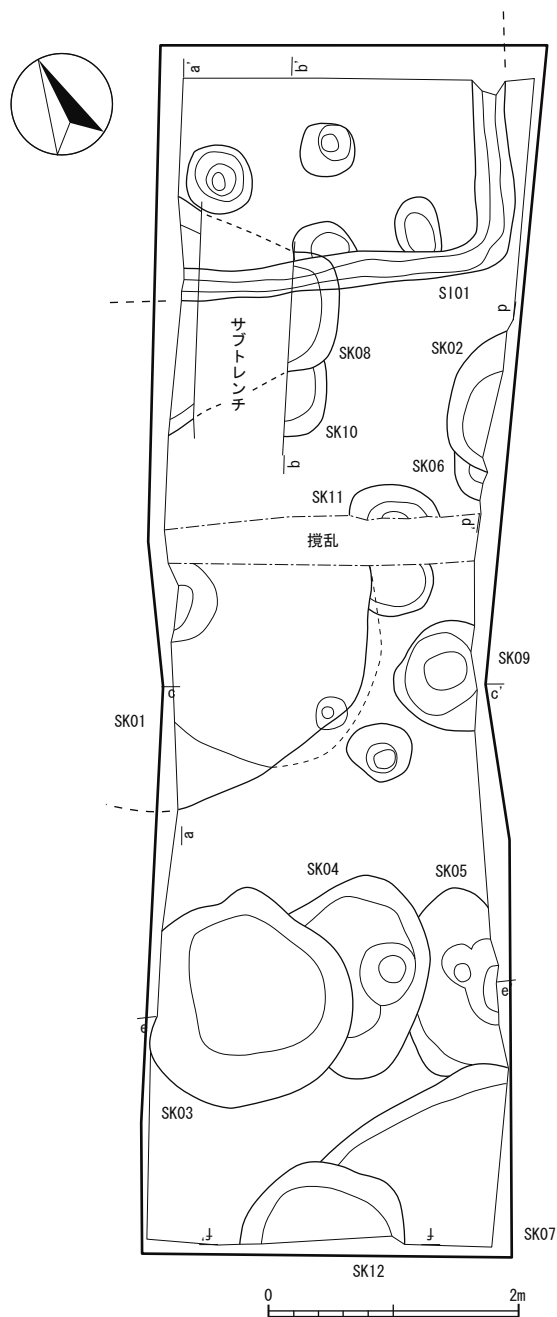


図5 平成25年度発掘調査
全体図 (S=1/60)

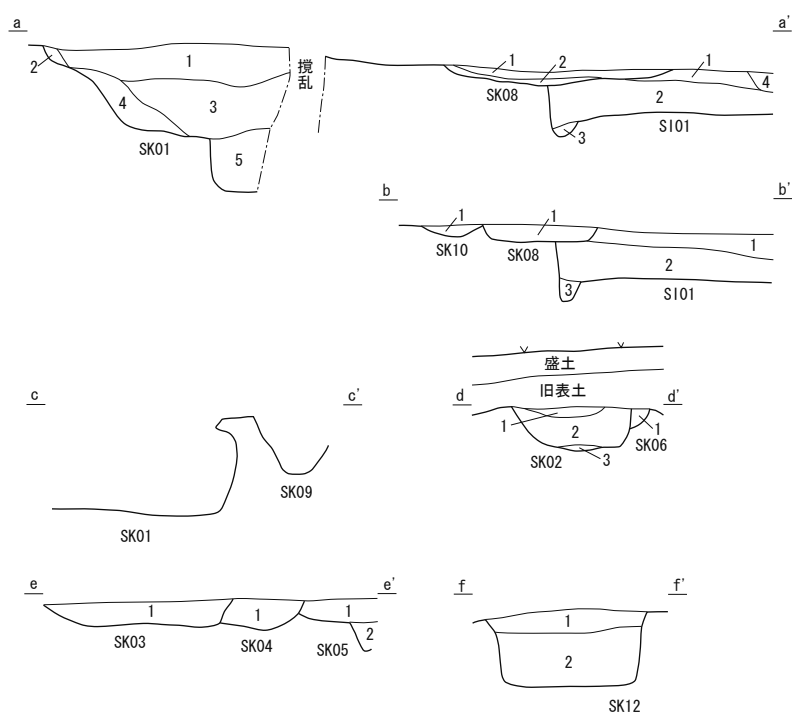


写真1 SK01 完掘状況 (北東から)



写真2 遺構確認状況 (北から)



写真3 完掘状況 (北から)